

鼻咽腔閉鎖機能不全を客観的に評価する幼児用の検査課題と重症度別指標の作成



【池袋キャンパス】健康メディカル学部 言語聴覚学科 准教授

佐藤 亜紀子 Sato Akiko

URL : [帝京平成大学 教員業績紹介ページ](#)

キーワード : 鼻咽腔閉鎖機能・口蓋裂・幼児・言語

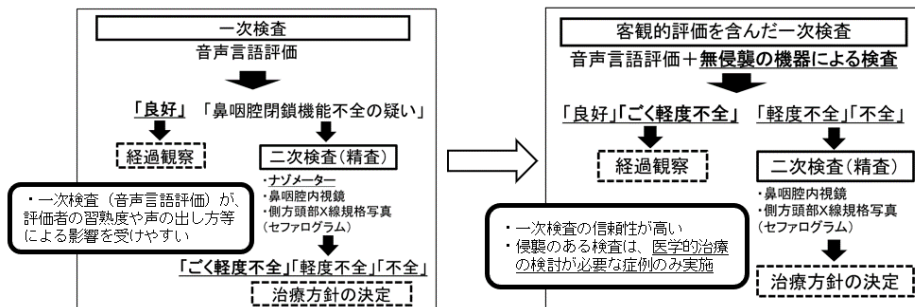


研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

鼻咽腔閉鎖機能は、発声時や嚥下時、軟口蓋と咽頭側壁・後壁が協調運動し、呼気や飲食物が鼻から漏れないように口腔と鼻腔を遮断する機能です。口蓋裂やその関連疾患（粘膜下口蓋裂や先天性鼻咽腔閉鎖不全症）により、鼻咽腔閉鎖機能不全が疑われる場合、複数の検査を実施して鼻咽腔閉鎖機能の総合判定をおこない、治療方針が決定されます。口蓋裂術後患者に対しては、適正なスピーチの獲得を促進させるために、幼児期から鼻咽腔閉鎖機能評価を実施します。幼児の鼻咽腔閉鎖機能評価は、言語聴覚士による音声言語評価が中心となります。音声言語評価は非侵襲的で幼児にも容易に実施できる反面、専門的な臨床経験を要し、経験が少ないと正確な判定に難渋することがあります。本研究では、音声言語評価を補完できる侵襲のない機器を用いた検査の小児用検査課題を作成し、重症度別の指標を作成して小児の検査への負担が少ない評価システムの構築を目指します。

現在、鼻咽腔閉鎖機能に問題のない幼児のデータと、口蓋裂やその関連疾患のある幼児のデータの収集・分析中です。口蓋裂術後は成人に至るまで経年的な治療が必要になるため、今後は学齢児についても研究を進めていく必要があると考えています。



幼児の負担を軽減した鼻咽腔閉鎖機能評価システムの構築

写真上：ナゾメーター6500 PENTAX MEDICAL

写真下：ヘッドセット（ハンドルタイプ）装着の様子

実学へのつながり・産業界や自治体へのアピールポイント・協力可能事項・協力希望事項

- ・鼻咽腔閉鎖機能不全の重症度別の指標を設定することで、小児の検査に対する心身の負担が少ない評価システムの構築が期待できます。
- ・幼児だけでなく、発達の遅れなどで検査協力を得るのが難しい患者に対しても、信頼性の高い鼻咽腔閉鎖機能評価を非侵襲的に実施できることが期待されます。

知的財産・論文・学術発表など（詳細は右上 QR コードの教員紹介からご確認ください）

- 【学会発表】・ナゾメーター検査における健常幼児向けの発話課題作成と鼻音化率基準範囲設定の試み
- ・ナゾメーター検査による鼻咽腔閉鎖機能評価に用いる日本語発話課題の長さに関する検討
- 【論文】・口蓋裂言語検査による鼻咽腔閉鎖機能の評価—内視鏡検査、側方頭部 X 線規格写真との関連—